
BLEACH 異端者の来訪

朱羅夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH 異端者の来訪

【Nコード】

N3231Z

【作者名】

朱羅夜

【あらすじ】

BLEACH」が大好きな中学2年生、獅王誠は、その夜パソコンで「BLEACH」のアニメを見ていた。

明日も学校だと溜息をつきながら、アニメを停止してパソコンを閉じようとしたときだった。

突然光りだしたパソコンに吸い込まれ、誠は姿を消してしまう。そして目覚めたそこはなんと……「ここって、まさか空座町？」

プロローグ

薄暗い部屋の中で、中学生ぐらいの男の子がパソコンに向かって座っていた。

パソコンの画面には最近ハマっているアニメ、「BLEACH」が流れている。

「ゴールデンでやってる割には流血多いよなあ……」

そう言いながらも、面白い事に変わりはない。

マンガも現在連載中の最新刊まで取り揃えてあり、部屋の隅にある本棚に並んでいる。

男の子は、部屋の時計を見て溜息をついた。

「もう2時か……明日も学校だし、もう寝ようかな」

まだ途中だったアニメを停止し、パソコンを閉じようとしたときだった。

突然、パソコンの画面が目が痛くなるほどの強烈な光を発した。

「うわっ！」

次の瞬間、男の子はパソコンの画面へと吸い込まれていった。

来る異端者は、その世界で、何を見て、何を感じるのだろうか……。
彼の者「獅王誠」に幸あらんことを……。。

第1話 目覚めたそこは……（前書き）

初めまして、ブリーチの二次小説を書いていく者です。
ちまちまやってくのですよろしくです

第1話 目覚めたそこは……

あの不思議な現象から目が覚めてみると、俺は意識を失う前と同じ部屋で目覚めた。

間抜けにも、椅子から倒れた格好である。

足は天に、手は地についており、まるで何かのエクササイズかのような恰好だ。

腰が痛いと思鳴を上げる前に、立ち上がった。

「なんだったんだ？ あれ……」

不思議に思いながらも、部屋の時計を見る。

時刻はまだ午前6時。学校に行くには余裕がある。

「久々に遅刻しないってのもいいかもな」

遅刻常習犯である俺は、遅刻しない俺を見てクラスの奴らが驚く姿を想像し、ニヤリと笑った。

いつものように制服に袖を通すと、ある違和感が沸いた。

「あれ？ これ俺の制服じゃない」

俺の通う学校の制服は、上下黒の学生服だ。

しかし、今袖を通したのは濃いグレーとそれと同じブレザータイプの服だった。

「なんなんだ？」

不思議に思いながらも、とりあえず制服を着て一階に降りた。居間のリビングには、メモ用紙と朝食が置かれている。

「ん？」

・・・メモ・・・

誠へ。

仕事で海外へ行くことになったのでよろしく。

ガス代と光熱費、電気代はお母さんの口座から落ちるけど、食費はリビングのテーブルの上にあります。

追伸。

親がいないからって学校をサボらないように。

「は？」

なんだよこれ、と誠はつぶやいた。

一見ふつつのメモのように思えるが、俺はそうは思わなかった。

「ただのパートが海外出張とかねえだろ……」

母子家庭である俺は、母さんのパートと、離婚した父さんからの養育費でこの家を支えている。

だから母さんが「海外」に行くことなんてまずありえないのだ。

おかしい、俺はすぐに気が付いた。

制服の事もそうだが、このメモで確信した。

「俺、めっちゃやばいんじゃないか？」

制服の胸ポケットに入っていた生徒手帳を取り出すと、見覚えのない校章と学校名。

「なんだ？ 空座中学…？ ってまさか……」

俺はパソコンに吸い込まれた事を思い出していた。

確かあの時見ていたアニメは今いる世界と同じ物だ。

「巻き込まれた？ そんなばかな、アニメじゃあるまいし」

まあ、ここはアニメと漫画の世界なんだけどさ…。

「まっ、いつか、遠目から井上や乱菊さんでも眺めてれば」

あ、でも乱菊さんは見えないか、死神だし。

そんな軽い考えを持ちながら、俺は空座中学へと向かった。

どうしてこうなった。

俺は今現在、学校へ向かう途中だ。

しかし、なぜ、どうして、こうなったんだ。

事の起こりは数分前、何故か覚えている学校までの道のりを歩いていると、見覚えのないオレンジ頭が前を歩いていた。

あれはまさか、この物語の主人公ではなかるうか。

あまりの嬉しさに声をかけようとしてみた俺だが、すぐにその足は止まった。

どう見てもアレな方々がこの物語の主人公、黒崎一護を取り囲んで

いたからだ。

黒崎は面倒くさそうに頭を描いて路地裏を指さした。取り囲んでいるやつらは、ニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべて路地裏に入っていく。

確かあそこは、建物の裏手が少しだけ空き地のようにになっているから、そこでやるんだろうな。

俺は介入すべきか否かで暫し立ち止まり、悩んだ。

すると、その路地裏にめちやくちやでかい男が入って行った。

「あれは…茶渡泰虎？」

めちやくちやでかい男、茶渡は路地裏に入っていく、すると悲鳴があがり、数名の男が顔から血を流して出てきた。

「ば、化け物だ！」

「逃げるお！」

どうやら介入しなくても済みそうだ。

「だけど、それじゃ面白くねえ」

せつかくブリーチの世界に来たんだ、楽しまねえとな
俺は意気揚々と路地裏に入り込んだ。

第2話 小さくて変な奴

一護視点

今日は久々に早起きしてみたら、いつもみたいにあのバカ親父が部屋に乗り込んできた。

最近はそのバカ親父も学習したのか、今日は少しばかり時間がかかった。

まあ、俺の勝ちだったんだけどな。

朝飯を食べた後、学校に向かっているとこの間ゲーセンでからんできた奴が仲間を呼んでやってきた。

めんどくさいとは思ったが、このまま学校に行けるわけもなく、俺は近くの路地裏の空き地でなら相手してやると言った。

で、空き地に入ったら入ったでいきなりかかってきやがった。

まったく、めんどくさいったらありやしねえ。

5、6人倒してからチャドが来た。

そういえば、この間のゲーセンの時チャドも一緒にいたんだっけ…。

まあ、そこまではよかったんだ。

そしたら突然アイツが割り込んできたんだ。

誠視点

とりあえずあいさつ代わりに空き地を塞いでいた奴3人をぶちのめ

した後、意気揚々と空き地に入ったら思惑通り黒崎一護と茶渡泰虎がいた。

それで二人とも「誰だ？」って顔で俺のこと見てやがる。制服が同じなのに、ちよつとした感動を覚える。

「なあに寄つてたかつて二人相手にしてんだよ、男は黙つてタイムンだろうが」

「誰だつ！ てめえ！」

「大勢で二人を相手するようなクズに教える名前なんざねえよ、この二人、とりあえず加勢すつけどよ、後3分で片付けないと遅刻だぜ」

「一護、アイツが誰かは後で聞けばいい、見たところ同じ学校みただ」

「そんなこと気にしねえよ、早く終わるならそれにこしたこたあねえ」

カスやクズを放置して話している俺たちに、バカが痺れを切らしたのか、走ってきた。

「このドチビがああああああ！」

「シャーラップ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

禁句を発言したバカに俺はサマーソルトをお見舞いした。

一応元の世界じゃ色々やってたからな、これくらい朝飯前だ。

サマーソルトで地に落ちた相手に俺は踵落としを決める。

殺しちゃいねえけど多分鼻はつぶれたな。

「えげつねえ」

「やりすぎだ」

「俺をチビって言うやつは誰だろうと潰す、この世で俺に会ったことを後悔しながら逝け」

「「字が違う」」

二人に突っ込まれながら、俺たちはカップラーメンが早く出来上がるより片付けると、そろって学校に向かった。省略したけど、とりあえず自己紹介はした。

茶渡視点

一護の助けに入って少しすると、変な奴が割って入ってきた。最初は、その背の低さから小学生かと思ったが、どうやら俺たちと同じ制服を着ているところを見ると同級生か、先輩だろう。

先輩だった場合は、どう対処すればいいのか困る。

「なあに寄ってたかって二人相手にしてんだよ、男は黙ってタイムンだろうが」

ソイツは俺と一護を取り囲んでる不良にそう言った。

男は黙ってタイムン……そういう訳でもなさそうだが……。

「誰だっ！ てめえ！」

「大勢で二人を相手するようなクズに教える名前なんざねえよ、その二人、とりあえず加勢すっけどよ、後3分で片付けないと遅刻だぜ」

そうやってソイツは笑った。俺もそれには同意だ、学校に遅刻するのは良くない。

「一護、アイツが誰かは後で聞けばいい、見たところ同じ学校みただ」

「そんなこと気にしねえよ、早く終わるならそれにこしたこたあねえ」

悠長に話しをしていると、不良の一人がソイツに殴り掛かった。

「このドチビがああああああ！」

「シャーラップ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ソイツはどこぞの戦隊物よろしくサマーソルトを決めると、倒れた相手に踵落としを食らわせた。

正直あれは見るに堪える、グロテスクだ。

それを見た一護が、ポツリと漏らした。

「えげつねえ」

「やりすぎだ」

その辺りにいた不良を投げ飛ばして言うと、ソイツは無表情で言った。

「俺をチビって言うやつは誰だろうと潰す、この世で俺に会ったことを後悔しながら逝け」

「「字が違う」」

一護と声をかぶらせながら言っただけは見た物の、ソイツはお構いなしに不良たちに突っ込んでいった。おかげで遅刻はしなさそうだ。

学校へ向かう途中、とりあえずソイツの名前を聞くことにした。

「名前は何という？」

「俺か？ 俺は獅王誠、獅子の獅に、王様の王、そこで新撰組の誠で獅王誠、よろしくな」

見た目の割りになかなか格好良い名前だと思った。

「黒崎一護だ、一に護るって書いて一護、よろしくな」

「茶渡泰虎、二人みたいに名前を説明するのは難しい、一護からはチャドって呼ばれている、好きに呼んでくれ」

「じゃあトラさんだな」

ふむ、トラさんが、初めて呼ばれたな。

「トラさん？ 俺たち同い年じゃねえのか？ 何で”さん”付なんだよ」

「いや、この中で一番老けてそうじゃん、なんとなく」

「なんとなくって、チャドに失礼じゃねえか」

「構わん、好きに呼べと言ったのは俺だ、一護」

突っかかりそうな一護を止め、言う。

「まっ、チャドがいいならそれでいいか」

「そういう事、ま、俺のことも好きに呼んでくれていいよ、さっ
「ぜ」

「ああ」

「おっ」

「じつじつこのいつもの日常に、この小さくて変なやつが混じった。

第2話 小さくて変な奴（後書き）

本当は一護視点でやろうとおもったけど、茶渡さんでメチャイマシ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3231z/>

BLEACH 異端者の来訪

2011年12月11日05時09分発行